

中学生・高校生の社会的態度に関する 縦断的研究（Ⅱ）*

久世 敏雄 後藤 宗理¹⁾ 浅野 敬子²⁾
宮沢 秀次³⁾ 二宮 克美 池田 博和
伊藤 義美⁴⁾

I 問題

われわれは、中学生や高校生の社会的態度がどのように形成され、変容されるのかを検討するために、昭和47年度以来、質問紙による縦断的調査資料の収集に努めてきた。そして、この目的のために、社会的態度を保守的革新的、大衆社会的という3つの側面から捉えることにして、質問紙を作成した。第I報（久世ほか、1979）では、昭和53年度までに得られた縦断的資料にもとづいて中学から高校までの6年間の社会的態度の変化の様相をみると、さらに6年間の変化を被調査者ごとに検討するための予備的段階として、被調査者をグループ化することを目的とする分析が試みられた。

第I報で得られた主な結果は次の通りである。6年間の社会的態度の態度得点と態度間相関の結果などから、①大衆社会的態度は、学年が進むにつれて強くなる傾向がある。②男子の大衆社会的態度および女子の3つのすべての態度は、6年間の時点間相関がすべて有意であり一貫した傾向を示している。③保守的態度と革新的態度との間には負の相関関係が、保守的態度と大衆社会的態度との間には正の相関関係がある、ということが明らかにされた。一方、被調査者をグループ化するための分析結果からは、①被調査者全体のうち70%を3つのグループに分けることができる。②この3つのグループは、中学1年の時点での大衆社会的態度に関して明白なグループ

間のちがいがある。③中学1年の時点で大衆社会的態度の傾向が最も強いグループは、学年の進行にともない、その傾向が一層強まる、などの知見が得られた。

これらの知見から、中学生・高校生の社会的態度の発達変容過程を理解する上で、大衆社会的態度の変化が重要な手がかりになるものと思われる。具体的な分析の視点としては、まず第一に、中学1年の時点でみられた大衆社会的態度におけるグループ間の差が他の態度の変化にどう影響するかを検討することが必要になるだろう。第二に、われわれが当初設定した保守的、革新的、大衆社会的という3つの態度の相互関係を6年間通じて比較検討しながら、大衆社会的態度を中心とした態度構造の変動をしらべることが求められる。

われわれがこれまで継続して行なってきた縦断的方法による資料の収集は、昭和54年度で当初の計画の完成をみた。そこで本報告では、上記の分析の視点を考慮に入れながら、これまでに蓄積された縦断的調査資料を一括して分析した結果を報告する。今回は、次の3点を中心にして、青年期の社会的態度の発達変容過程を検討することを目的としている。第一に、中学生・高校生の社会的態度の6年間の変化の様相を明らかにする。第二に中学1年の時点での大衆社会的態度の水準が、中学2年以降の3つの社会的態度の発達変容過程にどのように影響するかをしらべる。第三に、3つの社会的態度の構造が中学から高校にかけてどのように変化していくかを検討する。

II 方 法

1. 社会的態度の質問紙

社会的態度の質問紙（付表）は、保守的、革新的、および大衆社会的態度として用意されたそれぞれ13項目、計39項目の質問（表1）から構成されており、非常に贊

* 本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センターFACOM M-200によった。

1) 名古屋市立保育短期大学

2) 中京女子大学

3) 市郷学園大学

4) 名古屋大学教養部

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

表1 質問項目

項目番号	項目番号
1 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	22 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである
2 女が政治などに口だしすべきでない	23 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである
3 結婚は家柄を重んじなければならない	24 「方角が悪い」などということはまったく信用しない
4 伝統や習慣は尊重すべきである	25 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい
5 世間をわたるには義理や人情が最も大切である	26 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである
6 長男が家をつぐのは当然だ	27 流行語などはよく知っていないとはずかしい
7 親孝行は子どもの義務である	28 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない
8 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	29 みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする
9 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	30 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない
10 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	31 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい
11 日本は天皇を中心まとまるべきである	32 理論よりフィーリングやムードが大切である
12 デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	33 誰が衆議院の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う
13 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	34 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい
14 個人の自由は尊重すべきである	35 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようとする
15 正しいことであれば世間体など気にすべきでない	36 ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ
16 いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい	37 いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない
17 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである	38 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じる
18 いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	39 公害問題は被害者と加害者だけの問題である
19 デモやストをするのは労働者の当然の権利である	
20 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する	
21 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない	

(注) 項目番号1～13は保守的態度項目、14～26は革新的態度項目、27～39は大衆社会的態度項目である。以下の記述に使用する項目番号はこれによる。

成、賛成、賛成とも反対ともいえない、反対、非常に反対の5点尺度で評定を求めた。被調査者の各項目への反応に対して、非常に賛成の場合5点、賛成の場合4点、賛成とも反対ともいえないの場合3点、反対の場合2点、非常に反対の場合1点を与える、3つの社会的態度ごとに合計値を算出した。以下、態度得点という場合はこの合計値をさし、数値が大きいほどその態度が強いことを意味する。

2. 調査対象および調査時期

被調査者は、名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒である。今回分析に用いた調査対象は、昭和47年度に中学に入學し昭和52年度に高校を卒業した男女生徒、昭和48年度に中学に入學し、昭和53年度に高校を卒業した男女生徒、および昭和49年度に中学に入學し、昭和54年度に高校を卒業した男女生徒の3群のうち、中

学1年から高校3年まで毎年この調査をもれなく受けた合計140名（男子70名、女子70名）である。

調査は各年度の末に、クラスごとに集団で実施された。

III 結 果

1. 6年間の態度得点と相関の変動について

本項では、縦断的調査資料にもとづいて、(1)6年間の各社会的態度得点の平均値と時点間相関の変動、(2)3つの社会的態度の相互相関の推移についてみていく。

(1) 男女別にみた各社会的態度得点の平均値と時点間相関の変動について

まず、保守的、革新的、大衆社会的態度のそれぞれについて、男女別学年別に平均態度得点を算出した。表2がその結果である。3つの態度得点を比較してみると、男女ともいざれの学年においても革新的態度得点が、他の2つの態度得点よりも高いことがわかる。

表2 6年間の各社会的態度得点の平均値と標準偏差

性別	社会的態度	平均・標準偏差		学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
		M	SD							
男 子	保守的	M SD	35.73 5.12	34.93	34.96	35.49	35.73	35.47		
	革新的	M SD	48.56 3.74	47.34	46.53	46.86	46.43	46.71		
	大衆社会的	M SD	33.10 6.24	34.11	34.49	35.23	35.16	34.50		
女 子	保守的	M SD	35.39 5.97	34.24	33.67	33.61	34.81	34.24		
	革新的	M SD	47.03 4.18	46.59	45.99	45.56	45.43	46.04		
	大衆社会的	M SD	34.39 5.92	34.67	35.34	36.27	36.63	36.34		

表3 社会的態度別にみた平均態度得点の学年間比較の検定結果

社会的態度	保守的					革新的					大衆社会的									
	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	
中1					*	**														
中2							*				*	**								
中3					*			**												
高I					*				**											
高II						**				**										
高III							**					*								

(注) 斜線下段は男子、上段は女子についての検定結果である。表中*印は、該当する2つの学年の態度得点の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。同様にして、**印は $P < .01$ 、***印は $P < .001$ であることを示す。表8、表12、表16についても同様である。

学年ごとの各態度の平均値の変化を男女別にみてみよう。男子の場合、保守的態度得点は6年のすべての学年間で有意な差はみられない。革新的態度得点は、中学1年が中学2年以降のすべての学年よりも有意に高い（中学2年との間で $P < .05$ ；中学3年以降のすべての学年との間で、いずれも $P < .01$ ）。また、大衆社会的態度得点は、中学1年よりも高校I年、高校II年の方が有意に高い（それぞれ $P < .01$ 、 $P < .05$ ）。

女子の場合には、保守的態度得点は中学1年よりも中学3年および高校I年で有意に低く（それぞれ $P < .05$ 、 $P < .01$ ）、また中学3年および高校I年よりも高校II年で有意に高い（いずれも $P < .05$ ）。革新的態度得点

は中学1年よりも高校I年、高校II年で低く（それぞれ $P < .05$ 、 $P < .01$ ）、中学2年よりも高校I年、高校II年で低い（いずれも $P < .05$ ）。さらに、大衆社会的態度得点は、中学1年よりも高校I年、高校II年、高校III年で有意に高く（それぞれ $P < .001$ 、 $P < .001$ 、 $P < .01$ ）、同様にして、中学2年よりも高校I年、高校II年、高校III年で有意に高い（それぞれ $P < .01$ 、 $P < .001$ 、 $P < .01$ ）。

これまで述べてきた検定の結果をまとめたのが、表3である。

つぎに、上述の平均値の変動が一貫した傾向をもったものであるのかどうかを検討するために、態度ごとに求

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

表4 各社会的態度の6年間の時点間相関

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	中1		.601***	.504***	.613***	.470***	.490***
	中2	.487***		.728***	.703***	.591***	.508***
	中3	.246*	.345**		.712***	.549***	.515***
	高I	.226	.250*	.514***		.722***	.714***
	高II	.165	.195	.541***	.629***		.791***
	高III	.138	.186	.494***	.624***	.644***	
革新的	中1		.589***	.408***	.347**	.526***	.487***
	中2	.340**		.645***	.556***	.521***	.340***
	中3	.177	.177		.600***	.560***	.471***
	高I	.278*	.380***	.621***		.523***	.535***
	高II	.166	.309**	.609***	.561***		.720***
	高III	.281**	.173	.491***	.465***	.517***	
大衆社会的	中1		.665***	.752***	.706***	.719***	.661***
	中2	.461***		.772***	.700***	.722***	.653***
	中3	.435***	.572***		.793***	.770***	.744***
	高I	.514***	.621***	.657***		.818***	.832***
	高II	.421***	.670***	.659***	.635***		.811***
	高III	.244*	.511***	.504***	.549***	.685***	

(注) 斜線下段は男子、上段は女子の相関である。表中*印は、相関係数の有意性が $P < .05$, **印は $P < .01$, ***印は $P < .001$ であることを示す。以下、表5, 表9, 表10, 表13, 表14, 表17, 表18においても同様である。

表5 各学年における3つの態度の相関

性別	社会的態度	学年					
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
男子	保守的一革新的	-.136	-.128	-.392***	-.253*	-.322**	-.405***
	革新的一大衆社会的	-.098	-.056	-.183	-.020	.022	-.231
	大衆社会の一保守的	.322**	.136	.406***	.179	.327**	.547***
女子	保守的一革新的	-.310**	-.592***	-.482***	-.456***	-.469***	-.489***
	革新的一大衆社会的	.034	-.300**	-.159	-.202	-.221	-.328**
	大衆社会の一保守的	.091	.259*	.312**	.408***	.531***	.619***

めた6年間の時点間相関をみることにしよう(表4)。男子についてみると、保守的態度と革新的態度では、中学1年、中学2年と他の学年との間で一部有意な相関が得られていないが、中学3年以降はすべての時点間相関が有意であることがわかる。また、大衆社会的態度は6年間のすべての時点間相関が有意である。一方、女子では、3つの社会的態度のすべての時点間相関が有意である。

(2) 男女別にみた態度間相関の変動について

中学校・高校の各学年で3つの社会的態度の相関がどのようにになっているかをしらべるために、中学1年から高校3年までのそれぞれの学年における態度間相関を男女別に求めた。その結果が表5である。

6年間の全般的な傾向としては、男女とも保守的態度と革新的態度との間、および革新的態度と大衆社会的態度との間には負の相関関係が、また保守的態度と大衆社

会的態度との間には正の相関関係が認められる。

つぎに男女別にくわしくみていくことにしよう。男子では、保守的態度と革新的態度との間の相関関係をみると、中学3年以降のすべての学年で有意な負の相関が認められる。一方、革新的態度と大衆社会的態度との間には6年間を通じて1度も有意な相関はみられない。また保守的態度と大衆社会的態度との間の相関についてみると、中学2年と高校1年を除く4学年で有意な正の相関が認められる。

女子についてみると、保守的態度と革新的態度との相関は6年間を通じてすべて有意な負の値をとっていることが、表5からわかる。また、革新的態度と大衆社会的態度との間の相関をみると、中学2年と高校3年においてのみ有意な負の相関が認められる。さらに、保守的態度と大衆社会的態度との間の相関をみると、中学2年から高校3年までの5年間で有意な正の相関のあることがわかる。しかも、中学1年から高校3年へと徐々に相関が高くなっていくことがわかるのである。

これまでの結果を態度別にまとめてみると、保守的態度と革新的態度は、男女とも大きな変動はなく、全体として一貫した傾向を示しているといえる。一方、大衆社会的態度は、男女とも中学から高校にかけて、次第に強くなる傾向がある。しかもこの傾向は、一貫したものであることも認められている。

つぎに、3つの態度の関係をみると、6年間を通じて男女を問わず、保守的態度と革新的態度との間には負の

関係が、保守的態度と大衆社会的態度との間には正の関係が認められる。さらに女子では、保守的態度と大衆社会的態度との関係が、学年の進行にともない、次第に明確になってくることがわかる。

2. 大衆社会的態度の水準別にみた社会的態度の変容過程について

われわれは大衆社会的態度と保守的態度との間に密接な関係の見出されること、大衆社会的態度の一貫性が男女ともに高いことを指摘してきた。このことは、大衆社会的態度水準によって社会的態度の変容過程に違いがあることを示唆する。そこでここでは大衆社会的態度の水準によって調査対象者を3群に分け、それぞれの態度および態度間の関係の変容の過程を分析してみる。調査対象は男女別に、中学1年における大衆社会的態度得点が高位の群(H群)、中位の群(M群)、低位の群(L群)の3群にグループ化した。グループ化にあたっては男女それぞれ平均値±1/2σを基準点とした。この方法によって分けられたグループは表6のような調査対象数によって構成されている。

表6 大衆社会的態度水準によるグループの内訳

性別	グループ	H群	M群	L群
男	子	21	29	20
女	子	18	33	19

表7 H群における6年間の社会的態度得点の平均値と標準偏差

性別	社会的態度	平均・標準偏差	学年	H群					
				中1	中2	中3	高I	高II	高III
男	保守的	M SD	37.14 5.97	36.05 5.80	36.67 4.77	36.43 3.54	36.95 3.89	36.10 3.05	
	革新的	M SD	48.24 3.75	46.81 5.08	45.71 5.66	46.86 4.76	45.62 5.07	46.57 3.41	
	大衆社会的	M SD	40.71 4.16	37.71 4.78	38.33 5.88	39.24 6.27	39.10 4.50	36.29 5.06	
女	保守的	M SD	35.94 6.52	37.06 3.81	34.83 3.20	35.67 4.35	36.83 3.94	37.44 3.87	
	革新的	M SD	47.28 3.83	46.11 3.68	44.72 4.61	45.22 3.32	44.94 3.75	44.44 4.69	
	大衆社会的	M SD	41.67 3.16	39.06 4.87	40.56 3.78	41.56 3.82	42.56 4.57	41.67 3.03	

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅱ）

表8 H群における社会的態度の時点間差異の検定結果

社会的態度	保守的						革新的						大衆社会的						
	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III
中1					*			*	*	*			*						
中2			*										*				**	***	***
中3				*															
高I																			
高II													**						
高III													*	***					

表9 H群における各社会的態度の6年間の時点間相関

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	中1		.471*	.242	.443	.208	.237
	中2	.461*		.507*	.455	-.070	-.078
	中3	.025	.142		.380	.291	.324
	高I	.174	.018	.488*		.483*	.481*
	高II	.052	-.066	.255	.542*		.795***
	高III	-.405	-.227	.422	.454*	.713***	
革新的	中1		.490*	.504*	.180	.276	.349
	中2	.401		.637**	.326	.538*	.130
	中3	.015	.036		.527*	.618**	.408
	高I	.083	.220	.444*		.635**	.345
	高II	.008	.162	.780***	.696***		.627**
	高III	-.003	.174	.395	.276	.409	
大衆社会的	中1		.311	.292	.469*	.450	.252
	中2	.064		.680**	.741***	.642**	.488*
	中3	.207	.319		.532*	.513*	.367
	高I	.486*	.336	.451*		.649**	.621**
	高II	-.079	.352	.484*	.302		.720***
	高III	-.058	.376	.412	.456*	.793***	

表10 H群における3つの態度の相関

性別	社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
		中1	中2	中3	高I	高II	高III	
男子	保守的一革新的		.023	.393	-.525*	.075	.035	-.203
	革新的一大衆社会的		.168	-.446*	-.021	.159	.015	.048
	大衆社会の一保守的		.386	-.063	.211	-.018	.477*	.387
女子	保守的一革新的		-.004	-.265	-.390	-.219	-.216	.070
	革新的一大衆社会的		-.176	-.125	.090	-.057	-.008	.135
	大衆社会の一保守的		-.161	-.171	-.036	.150	.528*	.174

(1) 大衆社会的態度の水準別にみた各社会的態度得点の平均値と時点間相関の変動について

グループごとの態度得点の変化をみるとために6年間の態度得点の平均値および標準偏差を算出した。結果を表7、表11、表15に示す。

H群については、男子は保守的態度、革新的態度に有意な変化はみられない。一方、大衆社会的態度は中2で中1より低く ($P < .05$)、高IIIで中1、高I、高IIより低くなっている (それぞれ $P < .01$, $P < .05$, $P < .001$)。女子においては革新的態度が中3、高II、高IIIで中1より低く (ともに $P < .05$)、保守的態度は中3で中2、高IIIより低い (ともに $P < .05$)。また大衆社会的態度は中1、高I、高II、高IIIで中2より有意に高い (それぞれ $P < .05$, $P < .01$, $P < .01$, $P < .05$)。

つぎにM群についてみると、男子においては、保守的

態度が高IIIで中3より有意に高く ($P < .05$)、大衆社会的態度が高IIIで中1より有意に高い ($P < .05$) ほかは有意な変化はみられない。女子においては、保守的態度が中2、高Iで中1より低く (ともに $P < .05$)、革新的態度は中3、高IIで中1より低く (それぞれ $P < .05$, $P < .01$)、高IIIで高IIより高い ($P < .01$)。また大衆社会的態度は中3、高I、高IIで中1よりも有意に高い (それぞれ $P < .05$, $P < .01$, $P < .05$)。

最後にL群についてみてみると、男子は革新的態度が中2、中3、高I、高IIで中1より低く (それぞれ $P < .01$, $P < .01$, $P < .05$, $P < .05$)、保守的態度には有意な変化はみられない。また大衆社会的態度は中2以降すべての学年で中1より高い (それぞれ $P < .001$, $P < .01$, $P < .001$, $P < .01$)。女子においては革新的態度が高Iで中2、中3より低く (ともに

表11 M群における6年間の社会的態度得点の平均値と標準偏差

性別	社会的態度	平均・標準偏差		学年				中1	中2	中3	高I	高II	高III
		M	SD	中1	中2	中3							
男 子	保守的	M SD	35.86 4.70	34.48 4.43	34.17 3.56	35.59 4.35	35.21 4.74	36.45 5.43					
	革新的	M SD	47.79 3.88	48.03 4.15	47.07 3.97	47.07 4.20	46.86 5.00	46.17 5.36					
	大衆社会的	M SD	32.21 1.84	33.48 6.02	33.34 4.47	34.38 6.25	34.41 5.93	35.21 7.01					
女 子	保守的	M SD	35.21 5.90	33.97 5.21	34.18 4.39	33.61 4.89	34.09 5.13	33.48 6.49					
	革新的	M SD	47.12 4.84	46.06 4.77	45.52 4.42	45.52 4.60	45.12 4.81	46.55 4.90					
	大衆社会的	M SD	34.61 1.69	35.33 3.89	35.88 2.91	36.67 3.77	36.45 3.90	36.33 5.04					

表12 M群における社会的態度の時点間差異の検定結果

社会的態度	保守的						革新的						大衆社会的								
	学年			中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III	中1	中2	中3	高I	高II	高III
中1	*	*	*							*	*	**				*	***	***			
中2																					
中3																					
高I																					
高II																**					
高III			*													*					

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

表13 M群における各社会的態度の6年間の時点間相関

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
保守的	中1		.844***	.661***	.784***	.730***	.562***
	中2	.524**		.680***	.659***	.669***	.499**
	中3	.371*	.453*		.690***	.511**	.500**
	高I	.114	.272	.326		.807***	.777***
	高II	.149	.290	.555**	.733***		.854***
	高III	.258	.237	.506**	.648***	.606***	
革新的	中1		.778***	.559***	.534***	.667***	.531***
	中2	.395*		.550***	.527**	.564***	.314
	中3	.309	.078		.518**	.532***	.419*
	高I	.505**	.348	.608***		.614***	.629***
	高II	.305	.284	.454*	.588***		.821***
	高III	.416*	-.076	.449*	.382*	.544**	
大衆社会的	中1		-.013	.180	-.011	-.071	-.127
	中2	.365		.555***	.278	.399*	.236
	中3	.143	.425*		.576***	.514**	.518**
	高I	.316	.610***	.713***		.542***	.660***
	高II	.211	.574***	.628***	.630***		.501**
	高III	.091	.465*	.345	.475**	.638***	

表14 M群における3つの態度の相関

性別	社会的態度	学年					
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
男子	保守的一革新的	.024	-.583***	-.327	-.354	-.585***	-.513**
	革新的一大衆社会的	.151	.159	-.468**	-.340	.036	-.450*
	大衆社会の一保守的	.247	.229	.491**	.471**	.076	.560**
女子	保守的一革新的	-.465**	-.541***	-.267	-.365*	-.648***	-.642***
	革新的一大衆社会的	.098	-.237	.024	.053	-.255	-.476**
	大衆社会の一保守的	.168	-.120	.232	.264	.401*	.669***

$P < .05$), 高IIで中2より低い ($P < .05$)。保守的態度は中3, 高I, 高IIIにおいて中1より低く (ともに $P < .05$), 高IIで中3, 高Iより高い (ともに $P < .05$)。また大衆社会的態度は中2以降すべての学年において中1より高く ($P < .05$, $P < .05$, $P < .05$, $P < .001$, $P < .001$), 高IIでは中2よりも高い ($P < .05$)。

つぎに各時点の態度得点のグループ間比較を行なう (表19)。男子においては保守的態度には有意な差はみられない。また革新的態度については中1時点のM群, L群間に有意な差がみられ, L群はM群より有意に高い ($P < .05$)。一方大衆社会的態度は高IIIまでのすべての時点で H群, L群間に有意な差がみられ (それぞれ $P < .001$,

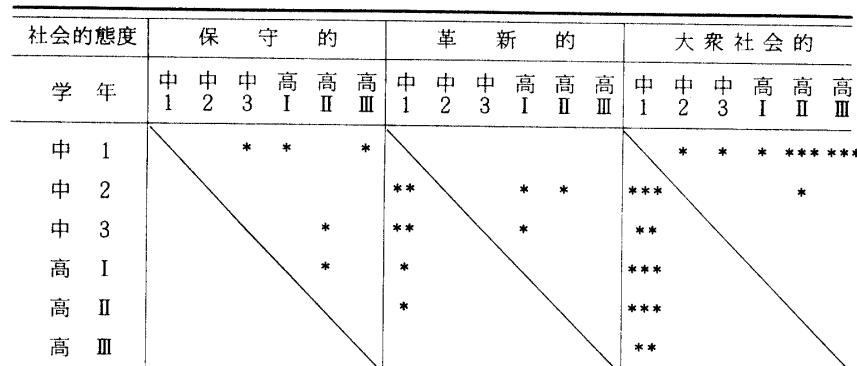
$P < .001$, $P < .01$, $P < .001$, $P < .001$, $P < .05$), H群, M群間にも高IIIを除くすべての時点で有意な差が得られた (中1から順に $P < .001$, $P < .05$, $P < .01$, $P < .01$, $P < .01$)。また中1時点ではM群とL群の間にも有意な差がみられた ($P < .001$)。

女子においては保守的態度が中2, 高I, 高IIIの時点でH群, L群間に有意な差を示し, H群はL群よりも高い (中2; $P < .01$, 高I; $P < .05$, 高III; $P < .01$)。また高IIIにおいてはH群とM群の間にも差がみられ, H群はM群よりも有意に高い ($P < .05$)。革新的態度は中3のH群, L群間に差がみられる ($P < .05$) 以外にはグループ間の有意な差は得られない。また大衆社会的態

表15 L群における6年間の社会的態度得点の平均値と標準偏差

性別	社会的態度	平均・標準偏差	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
				M	SD	M	SD	M	SD
男子	保守的	M SD	34.05 4.47	34.40 4.37	34.30 5.26	34.35 5.22	35.20 5.41	33.40 6.34	
	革新的	M SD	50.00 3.28	46.90 4.34	46.60 4.38	46.55 5.46	46.65 4.94	47.65 5.61	
	大衆社会的	M SD	26.40 2.42	31.25 5.26	32.10 6.35	32.25 5.67	32.10 5.58	31.60 6.72	
女子	保守的	M SD	35.16 5.85	32.05 6.28	31.68 5.77	31.68 5.50	34.16 5.38	32.53 5.04	
	革新的	M SD	46.63 3.34	47.95 5.17	48.00 5.03	45.96 4.99	46.42 4.93	46.68 3.71	
	大衆社会的	M SD	27.11 3.25	29.37 4.47	29.47 5.02	30.58 6.01	31.32 5.47	31.32 5.74	

表16 L群における社会的態度の時点間差異の検定結果



度は中1時点ばかりでなく、すべての時点で全グループの間に有意な差が得られた（中2のH群、M群間および高II、高IIIのL群、M群間で $P < .01$ 、その他はすべて $P < .001$ ）。

次にこのようなグループごとの変化が一貫した傾向をもつものであるかを明らかにするため、各態度得点の6年間の時点間相関係数をグループごとに算出した。結果は表9、表13、表17に示すとおりである。

大衆社会的傾向の水準により態度の一貫性には差がみられ、H群では全般に相関が低い。

H群の結果からみてみると、男子では保守的態度は高I、高II、高IIIの間に有意な相関が得られたのをはじめとし、中1と中2、中3と高Iの隣接時点間には有意な正の相関が得られたが、中2と中3との間の相関は高くなく、中1、中2と中3以降の相関は極めて低いか負の相関を示している。革新的態度では中3、高I、高IIの

間に有意な相関が得られたが中1、中2と中3以降の間の相関は低い。大衆社会的態度では中1と他の時点では高Iを除き全般に相関が低いが、中3と高I、高II、高I、高IIIと高IIIの間には有意な相関が得られた。女子の場合には保守的態度、革新的態度とともに隣接した時点の間のほとんどで有意な正の相関が得られ、また大衆社会的態度では全般に相関が高く、中2以降の時点間のほとんどで有意な正の相関が得られた。

L群においてはH群と比較してかなり高い一貫性がみられる。男子では大衆社会的態度、革新的態度は中2以降の各時点間に一貫して有意な正の相関が得られ、保守的態度にも中3以降のすべての時点間に有意な相関がみられる。女子では、中1と他の時点との間にも有意な相関関係が散見される。さらに保守的態度と大衆社会的態度では中2以降の時点間のすべてで有意な正の相関が得られた。

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

表17 L群における各社会的態度の6年間の時点間相関

社会的態度	学年	中 1	中 2	中 3	高 I	高 II	高 III
保守的	中 1		.432	.523*	.544*	.253	.634**
	中 2	.433		.827***	.799***	.698***	.612**
	中 3	.306	.434		.844***	.710***	.606**
	高 I	.331	.420	.685***		.708***	.684***
	高 II	.229	.279	.703***	.551*		.637**
	高 III	.237	.424	.612**	.646**	.721***	
革新的	中 1		.353	.152	.072	.470*	.649**
	中 2	.318		.760***	.706***	.409	.593**
	中 3	.279	.488*		.800***	.540*	.639**
	高 I	.265	.591**	.880***		.319	.544*
	高 II	.136	.511*	.586**	.425		.652**
	高 III	.200	.617**	.774***	.744***	.611**	
大衆社会的	中 1		.460*	.393	.426	.555*	.723***
	中 2	.282		.539*	.516*	.570*	.716***
	中 3	.087	.724***		.637**	.622**	.688***
	高 I	.192	.628**	.608**		.797***	.835***
	高 II	.001	.802***	.643**	.655**		.902***
	高 III	.095	.542*	.697***	.656**	.653**	

表18 L群における3つの態度の相関

性別	社会的態度	学 年		中 1	中 2	中 3	高 I	高 II	高 III
		H	M						
男子	保守的一革新的	- .511*	- .292	- .255	- .393	- .226	- .293		
	革新的一大衆社会的	- .106	.068	- .031	.171	.190	.045		
	大衆社会の一保守的	.047	.025	.361	.240	.472*	.524*		
女子	保守的一革新的	- .313	- .798***	- .692***	- .717***	- .317	- .415		
	革新的一大衆社会的	- .099	- .410	.057	- .569*	- .243	- .191		
	大衆社会の一保守的	.353	.474*	.247	.426	.775***	.577**		

表19 学年ごとにみたグループ間の差異の検定結果

学 年	中 1			中 2			中 3			高 I			高 II			高 III		
社会的態度	群	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L		
保守的態度	H				*					*						*	***	
	M																	
	L																	
革新的态度	H							*										
	M																	
	L				*													
大衆社会的態度	H	***	***	***	**	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	
	M	***	***	***	*	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	**	**	
	L	***	***	***	***	***	***	**	***	***	***	***	***	***	*			

最後にM群についてみると、男子ではL群とH群の中間的傾向を示している。一方女子では保守的態度、革新的態度の時点間相関が全般に高く、保守的態度はすべての時点間に、革新的態度は中2と高3の間以外のすべての時点間に有意な正の相関が得られた。

以上のことから、H群においては6年間を通じてみると社会的態度はグループ内でかなり変動していくが、L群では中2、中3以降で安定すること、M群では男女で異なる傾向を示し、女子では保守的態度、革新的態度が6年間を通じてグループ内で高い一貫性を示し、H群よりも安定しているのに対し、男子ではH群、L群の中間的傾向を示していることがわかる。

(2) 大衆社会的態度水準別にみた態度間相関とその変動

3つの態度間の関係を見るために、グループごとの態度間相関係数を男女別、学年ごとに算出した。結果は表10、表14、表18に示す。

全般的にみるとどこでも保守的態度と革新的態度の間に負の相関が、保守的態度と大衆社会的態度の間には正の相関がみられたが、グループ間にはかなりの差があった。H群においては態度間の相関は全般に低く、しかも時点によって変動する。M群においては高3時点では保守的態度と革新的態度の負の相関、革新的態度と大衆社会的態度の負の相関、保守的態度と大衆社会的態度の正の相関が有意であり、他のいくつかの時点においても同様の相関関係がみられる。L群においては高2、高3時点では保守的態度と大衆社会的態度が有意な正の相関を示すが、保守的態度と革新的態度の負の相関関係は高2、高3でむしろ低下する。また男女を比較してみると態度間相関はL群の男子では低い。

3. 因子構造の6年間の変動について

(1) 分析方法について

社会的態度の構造が6年間不变であるのか、それとも当初の関係が6年の間に変化していくものなのかを調べるために因子分析を行なう場合には、次のような方法を考えられる。(なお、本研究では男女別に39項目の質問に対する反応を6回収集したわけだが、ここでは、そのうち男子についての分析を行なうことと想定して説明を加えることにする。)

1)各学年の資料を独立に因子分析してその結果を比較する(本研究の場合、39項目について70名の資料が6組あると考えて、39項目の因子分析を6回行なうことになる)。

2)6年間のそれぞれの時点の項目を別々のものとみなして6年分の資料を1度に因子分析する(本研究の場合、

39×6 、つまり234項目の因子分析を1回行なうことになる)。

3)6年間のそれぞれの時点での同一個人を別々の人物とみなして6年分の資料を1度に因子分析する(本研究の場合、39項目について 70×6 、つまり420名分の資料が1組あると考えて、39項目の因子分析を1回行なうことになる)。

これらの方法には一長一短があるが、それらの問題点についての議論はBentler(1973)に譲り、本研究では基本的には3)の方法によりながら因子分析を行なうこととする。

われわれは、因子構造の変動をみることを目的としているが、上記1)、2)の方法では因子構造の変動を十分把握することができないので、ここでは3)によりながら、さらに平均値の変動が因子構造の変動に影響しない方法をとることが望ましいと思われる。そこで本研究では各学年の資料を平均0、分散1に変換した上で、3)の方法による因子分析を行なうこととする。

因子構造の変動をしらべるために、つぎに、因子分析の結果にもとづいて項目をいくつかのグループに分け、グループセントロイド法によりながら項目グループごとのまとまり具合をみる。そしてさらに、各時点での各項目グループの信頼性を検討するために、標準化 α 係数を求め、その変化や合成得点の項目グループ間相関、項目グループ別時点間相関についても検討する。

(2) 因子構造について

これまでに行なってきたクラスター分析の結果(久世ほか、1978)をはじめ、各種の因子分析の結果(後藤ほか、1979)などから、4因子を抽出することが適当と考えられた。そこで、主因子法による因子分析を行なって4因子を抽出し、のちに正規バリマックス回転を施したところ、表20に示すような結果を得た。

それぞれの因子での負荷量の大きい代表的な項目の項目番号と項目内容を列挙すると次のようになる。

第I因子では、

27「流行語などはよく知っていないとはずかしい」

29「みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする」

31「中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい」

32「理論よりフィーリングやムードが大切である」

38「皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じる」

などの項目で負荷量が大きく、内容的には大衆社会的態度のうち仲間への同調傾向や感覚的な判断による行動様式を示すものであった。そこで第I因子は「大衆社会的

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

表20 社会的態度の因子分析結果

因子 項目番号	I	II	III	IV
1	.269	.320	.371	-.014
2	-.023	.074	.638	-.015
3	.007	.443	.213	-.130
4	-.071	.008	.007	-.528
5	.186	-.114	.180	-.389
6	.086	.238	.220	-.336
7	-.070	-.094	.030	-.605
8	-.039	.088	.039	-.506
9	.139	.414	-.008	-.367
10	.005	.152	.347	-.248
11	.239	.433	.125	-.215
12	.342	.453	.037	-.050
13	.079	.177	.440	-.349
14	.197	-.476	.018	.090
15	-.219	-.430	-.035	-.215
16	-.043	-.149	-.294	-.168
17	-.104	-.498	.059	-.028
18	.070	-.307	-.036	.139
19	-.142	-.537	.144	-.016
20	-.058	-.375	-.269	-.301
21	.316	-.588	.181	.043
22	-.054	-.172	-.108	-.176
23	.183	-.009	-.534	.193
24	-.163	-.111	-.047	.354
25	-.234	-.257	.117	.136
26	.275	-.440	-.236	-.043
27	.698	.049	-.039	-.062
28	.244	.241	.212	-.092
29	.708	.119	-.101	-.000
30	.348	.277	.392	.114
31	.515	-.077	.433	.086
32	.536	-.182	.276	-.049
33	.193	-.116	.328	.057
34	.402	.046	.018	-.273
35	.032	.070	.460	.389
36	.408	.135	.423	.237
37	.189	-.142	.493	.047
38	.643	-.034	.073	.013
39	.256	.272	.469	.310
2乗和	3.349	3.184	3.033	2.378

態度因子」と呼ぶことにする。

第Ⅱ因子は、

- 3 「結婚は家柄を重んじなければならない」
 - 11 「日本は天皇を中心まとまるべきである」
 - 12 「デモやストでさわぐのは民主国家の恥である」
 - 14 「個人の自由は尊重すべきである」(逆符号)
 - 17 「社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである」(逆符号)
 - 19 「デモやストをするのは労働者の当然の権利である」(逆符号)
 - 21 「男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない」(逆符号)
- などの項目で負荷量が大きい。これらの項目は、いわゆる保守一革新の軸をなすものであり、第Ⅱ因子は、「保守的一革新的態度因子」と考えられる。

第Ⅲ因子は、

- 2 「女が政治などに口だしすべきでない」
 - 10 「世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない」
 - 13 「家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい」
 - 23 「家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである」(逆符号)
 - 35 「共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする」
 - 37 「いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない」
 - 39 「公害問題は被害者と加害者だけの問題である」
- などの項目で負荷量が大きい。これらは内容としては、権威主義的、家族制度肯定的、男尊女卑的、政治的無関心などの項目からなっている。そこで第Ⅲ因子は「権威主義的・政治的無関心因子」とした。

第Ⅳ因子では、

- 4 「伝統や習慣は尊重すべきである」
- 7 「親孝行は子どもの義務である」
- 8 「目上の人にはもっと敬語を使った方がよい」
- 24 「『方角が悪い』などということはまったく信用しない」(逆符号)

などの項目の負荷量が大きい。この結果から、第Ⅳ因子は、「伝統的価値観因子」と考えられる。

(3) 因子の変動について

上で見出された各因子が6年間にどのように変動するかをしらべるために、グループセントロイド法により各学年の因子負荷行列を求め、さらに各学年における項目グループの信頼性をみるために標準化 α 係数(三宅ほか、1977)を求める。なお、この係数は、いわゆる Cronbach の α 係数において各变数の値が分散1に標準化された場

原 著

表21 学年別にみたグループセントロイド法による
因子負荷 (項目グループ別; 男子)

学年		中1	中2	中3	高I	高II	高III
項目	番号						
I	27	.671	.571	.631	.808	.765	.764
	29	.747	.545	.575	.586	.732	.764
	31	.530	.629	.529	.630	.594	.693
	32	.593	.497	.570	.669	.674	.651
	34	.431	.446	.511	.538	.582	.550
	38	.682	.572	.687	.798	.741	.813
II	3	.383	.449	.445	.372	.579	.462
	9	.233	.468	.466	.404	.390	.521
	11	.494	.394	.320	.322	.668	.590
	12	.389	.539	.501	.513	.430	.510
	14	.073	.389	.593	.479	.481	.529
	15	.227	.496	.557	.363	.569	.522
	17	.443	.355	.464	.634	.625	.512
	18	.375	.433	.349	.345	.566	.454
	19	.423	.438	.236	.600	.531	.665
	20	.312	.346	.375	.548	.564	.535
	21	.402	.468	.352	.651	.618	.587
	26	.377	.456	.600	.549	.543	.489
III	1	.537	.400	.449	.561	.556	.583
	2	.408	.585	.639	.594	.463	.648
	10	.343	.289	.371	.487	.374	.268
	13	.449	.349	.363	.495	.375	.541
	23	.260	.299	.466	.301	.467	.432
	30	.584	.520	.696	.697	.527	.636
	33	.412	.362	.272	.389	.478	.431
	35	.440	.518	.609	.415	.524	.603
	36	.730	.524	.524	.511	.534	.651
	37	.505	.441	.466	.504	.477	.518
	39	.691	.647	.496	.697	.536	.633
IV	4	.503	.754	.528	.534	.520	.524
	5	.569	.486	.546	.625	.485	.647
	6	.368	.403	.417	.559	.441	.534
	7	.523	.373	.483	.592	.633	.583
	8	.394	.488	.384	.398	.491	.566
	24	.579	.389	.445	.466	.387	.323

(注) 実際の計算にあたっては、項目番号14～26は符号が反転させてある。また、項目番号16, 22, 25, 28はいずれのグループにも属さないので表から除外した。表

表22 学年別にみたグループセントロイド法による
因子負荷 (項目グループ別; 女子)

学年		中1	中2	中3	高I	高II	高III
項目	番号						
I	27	.765	.699	.626	.658	.712	.735
	29	.760	.661	.710	.810	.673	.700
	31	.576	.757	.467	.554	.649	.526
	32	.672	.739	.771	.645	.712	.712
	34	.552	.361	.427	.523	.519	.493
	38	.593	.660	.599	.667	.647	.673
II	3	.308	.344	.481	.480	.519	.606
	9	.505	.627	.384	.492	.533	.540
	11	.459	.451	.449	.571	.496	.415
	12	.434	.566	.516	.587	.518	.488
	14	.472	.492	.527	.481	.582	.534
	15	.257	.419	.395	.565	.567	.484
	17	.445	.429	.580	.425	.531	.516
	18	.434	.445	.203	.253	.417	.172
	19	.638	.621	.525	.532	.483	.612
	20	.330	.395	.574	.382	.379	.452
	21	.502	.519	.550	.462	.513	.466
	26	.436	.365	.536	.389	.414	.539
III	1	.487	.452	.508	.610	.692	.685
	2	.644	.623	.607	.443	.640	.689
	10	.193	.391	.442	.570	.379	.499
	13	.372	.387	.534	.507	.536	.504
	23	.303	.514	.517	.511	.461	.436
	30	.513	.367	.564	.614	.640	.686
	33	.504	.285	.468	.453	.437	.512
	35	.358	.477	.564	.435	.385	.467
	36	.508	.594	.587	.677	.697	.658
	37	.480	.603	.516	.558	.602	.449
	39	.578	.606	.576	.599	.611	.667
IV	4	.651	.680	.532	.631	.557	.583
	5	.469	.348	.486	.612	.417	.564
	6	.596	.536	.467	.449	.487	.524
	7	.646	.585	.509	.600	.491	.592
	8	.590	.686	.483	.580	.617	.682
	24	.543	.668	.408	.714	.647	.600

22についても同様である。また、項目グループIからIVは、因子分析で得られた第I因子から第IV因子に対応したグループである。

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

合にあたる。

この分析のために上記の項目のほか、これまでに行なった種々の分析結果ならびに項目内容などを考慮に入れて、残りの項目を各項目グループに加えた。それらの項目グループの内訳は、表21、22に示した通りである。なお、項目16、22、25、28はいずれのグループにもあてはまらなかったので、残余項目として扱い、記述から除外した。

項目グループごとに因子負荷量の学年別変化をみるとどの学年をみても、ほとんどの項目で負荷量が大きいことがわかる。中にはある時点での数値の小さい項目もあるが、それは一時的なもので、6年間を通して負荷量の小さい項目はない。そして、このような状況は、表21、22から明らかのように男女を問わず認められている。

つぎに、それぞれの項目グループの信頼性が学年間でどのように変動するかを見るために、標準化 α 係数を項目グループ別、学年別に求めた。その結果が表23である。

表23 学年別にみた各項目グループの標準化 α 係数

性別 グループ	学年						
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
男 子	I	.660	.523	.613	.756	.769	.799
	II	.324	.612	.617	.699	.787	.769
	III	.679	.603	.677	.721	.671	.758
	IV	.365	.340	.284	.486	.377	.487
女 子	I	.731	.721	.644	.716	.729	.712
	II	.610	.684	.691	.677	.721	.705
	III	.604	.669	.750	.761	.773	.790
	IV	.611	.613	.335	.640	.504	.627

男子についてみると、第Ⅰグループ（大衆社会的態度項目群）の係数は、中学2年でやや小さくなるものの6年間を通じて変動が小さく、とくに高校3年間は変化が小さい。第Ⅱグループ（保守的一革新的態度項目群）は中学2年以降で変動が小さい。第Ⅲグループ（権威主義的一政治的無関心項目群）は、第Ⅰグループ同様、6年間を通じて変動が小さい。第Ⅳグループ（伝統的価値観項目群）の係数は、他の3グループのそれより変動が大きくなっている。

女子の場合は、第Ⅰグループ、第Ⅱグループとも6年間を通じて変動が小さい。第Ⅲグループは中学1年から徐々に数値が大きくなり、学年が進むにつれて信頼性を増すことがわかる。そして中学3年以降は変動が小さいこともわかる。一方、第Ⅳグループの数値をみると、中学3年と高校2年で数値が小さくなっている。

他の項目グループに比べると変動が大きいといえる。

最後に、項目グループ内部の安定性と項目グループ間の関係についてみておく。表24には各項目グループの合成得点の時点間相関を示した。男子で、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳグループにおいて、中学1年、中学2年と他の学年との間で一部低い相関がみられるが、女子の4グループを含めて、全般に相関は高い。とくに、男女とも第Ⅰグループ（大衆社会的態度項目群）の相関が高いことがわかる。

表25は、合成得点にもとづいて項目グループ間相関を学年別にみたものである。表から比較的相関の高い項目グループの組み合わせを拾い上げてみよう。男女とも、第Ⅰグループ（大衆社会的態度項目群）と第Ⅲグループ（権威主義的一政治的無関心項目群）との相関が6年間を通じて高い。男子の場合には、その他に6年間を通じて相関の高い組み合わせは得られていない。一方女子の

表24 項目グループ別にみた合成得点の時点間相関

項目 グループ	学年	中1	中2	中3	高I	高II	高III
第 I グ ル ー プ	中1		.714	.803	.663	.714	.707
	中2	.553		.730	.565	.660	.632
	中3	.556	.558		.688	.700	.608
	高I	.532	.573	.762		.804	.729
	高II	.459	.594	.686	.674		.749
	高III	.380	.544	.570	.615	.767	
第 II グ ル ー プ	中1		.691	.505	.519	.474	.395
	中2	.370		.699	.651	.575	.472
	中3	.226	.350		.647	.513	.431
	高I	.353	.506	.412		.531	.499
	高II	.165	.311	.493	.468		.773
	高III	.265	.091	.391	.497	.458	
第 III グ ル ー プ	中1		.612	.618	.558	.437	.476
	中2	.549		.773	.666	.604	.566
	中3	.243	.519		.794	.635	.618
	高I	.328	.505	.593		.768	.754
	高II	.222	.489	.675	.671		.791
	高III	.205	.426	.588	.576	.688	
第 IV グ ル ー プ	中1		.430	.419	.494	.429	.404
	中2	.437		.630	.559	.541	.389
	中3	.352	.356		.575	.599	.416
	高I	.317	.529	.622		.704	.548
	高II	.228	.301	.526	.583		.727
	高III	.128	.378	.544	.627	.654	

(注) 表中、下段は男子、上段は女子である。

表25 学年別にみた合成得点の項目グループ間相関

性別	項目グループ	学年					
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
男	I-II	.108	.080	.108	-.097	-.002	.315
	I-III	.312	.320	.378	.401	.437	.458
	I-IV	.061	-.110	.029	-.023	.257	.150
	II-III	.302	.208	.272	-.086	.103	.378
女	II-IV	.006	-.100	.085	-.115	.036	.200
	III-IV	-.061	-.275	.164	.007	.131	.202
	I-II	-.097	.052	.003	.075	.131	.279
	I-III	.379	.311	.464	.364	.370	.464
子	I-IV	.031	.172	.101	.307	.382	.284
	II-III	.330	.445	.386	.333	.464	.588
	II-IV	.390	.532	.235	.186	.192	.298
	III-IV	.047	.085	.092	.037	.228	.415

場合をみると、第Ⅱグループ（保守的一革新的態度項目群）と第Ⅲグループ（権威主義的一政治的無関心項目群）との相関が6年間を通じて比較的高い。このほか、女子では第Ⅱグループと第Ⅳグループとの相関が中学1年、中学2年で高いこと、第Ⅰグループと第Ⅳグループとの相関が高校I年、高校II年で高いことなどの結果を得ている。

以上の結果から、因子分析の結果得られた4つの項目グループは、グループセントロイド法による因子負荷行列をみると、男女ともそれが1つのまとまりをみており、しかも6年間を通じて大きな変化はみられないといえる。しかし、表23、表24の結果をみると、男子では大衆社会的態度項目群は安定しているが、他の3グループとくに伝統的価値観項目群ではやや安定を欠いた傾向をみせている。

一方女子では、伝統的価値観項目群を除く3つの項目群が6年間を通じて安定していることがわかる。

IV 討論

1. 本研究で得られた結果の概要

本研究では中学から高校にかけての社会的態度に関する縦断的資料に基づき、青年期における社会的態度の変容過程を明らかにしようと試みた。特に今回の報告においてはこの問題に大衆社会的な態度が果たす役割に注目し、(1)6年間の全般的な傾向、(2)中1時点での大衆社会

的態度水準別に見た社会的態度およびその変化の特徴、

(3)態度構造の変化の3つの側面から分析を行なった。それぞれの分析で得られた知見は次のとおりである。

(1) 社会的態度の6年間の様相について

- ①大衆社会的態度は女子においては、学年が進むにつれて強まる傾向にある。
- ②社会的態度の安定性は大衆社会的態度については男女とも高く、また女子では保守的態度、革新的態度も高い。

③保守的態度と革新的態度との間には負の相関関係が、保守的態度と大衆社会的態度との間には正の相関関係があり、この関係は学年が進むに従い明確になる。

(2) 大衆社会的態度の水準別にみた社会的態度の変容過程について

- ①大衆社会的態度の水準により調査対象をH群、M群、L群の3群に分けた場合、大衆社会的態度のグループ差は高校III年まで維持されていく。この傾向は特に女子において顕著である。

②保守的態度は中学1年時点ではグループ間に差はないが、女子においては次第にその差が現われる。これは女子の場合にはL群、M群での保守的態度得点の低下に基づいている。

③革新的態度のグループ間の差は中学1年時点の男子、中学3年時点の女子においてみられるのみで、あとの学年では男女とも差はみられない。

④社会的態度の安定性はH群において低く、M、L群においては比較的高い。

⑤態度間の関係は(1)の分析と同様の傾向を示す。この関係はM群の高校III年時点において最も顕著になる。H群では男女とも態度間の関係は明確でない。またL群では高IIIでの保守的態度と大衆社会的態度の間には正の相関関係があるが、保守的態度と革新的態度との負の相関関係は高IIIになってむしろ不明確になる。

(3) 態度構造の変動について

- ①因子分析によって、「大衆社会的態度因子」「保守的一革新的態度因子」「権威主義的一政治的無関心因子」「伝統的価値観因子」の4因子が見出された。

②グループセントロイド法により算出した項目グループごとの因子負荷量は学年を問わず比較的安定している。

③標準化 α 係数の変化をみると、大衆社会的態度因子、保守的一革新的態度因子、権威主義的一政治的無関心因子の3つの項目グループにおいては変

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

動が小さいのに対し、男子の伝統的価値観因子の項目グループにおいては変動が大きい。

④項目グループごとに算出した時点間相関係数は全般に高い。中でも大衆社会的態度項目のグループでは、時点間相関が特に高い。

⑤項目グループ間の相関についてみると、大衆社会的態度項目群と権威主義的一政治的無関心項目群との相関は男女とも6年間を通じて高い。また女子の場合には保守的一革新的態度項目群と権威主義的一政治的無関心項目群との相関も6年間を通じて高い。

以上の分析結果から、社会的態度は中学・高校の6年間に構造化、安定化の過程をたどること、この過程には大衆社会的態度の水準によって違いの見られること、大衆社会的態度はさらに大衆社会的・同調的傾向と、無関心傾向とに分けられ、後者は保守的態度の内の形式重視傾向とともに権威主義的一政治的無関心の因子を構成すること、大衆社会的・同調傾向には高い一貫性・安定性が認められること、保守的態度および革新的態度はこの同調傾向との関係を様々に変化させながら進行していくことが明らかになった。

2. 大衆社会的態度水準別にみた社会的態度の変動について

われわれは、中学1年時点での大衆社会的態度の水準によって、その後の社会的態度がどのように変動するかを調べた。

中学1年時点の大衆社会的態度の強いグループ（H群）では態度の安定性が低く、3つの社会的態度の関係も不明確である。男女別にみると大衆社会的態度が男子では高Ⅱから高Ⅲにかけて安定し、しかも低下するが、女子では比較的早くから安定し、しかも中2以降は上昇する傾向を示す。また女子の場合には革新的態度の低下傾向がみられる。

大衆社会的態度中位のグループ（M群）では大衆社会的態度はしだいに上昇していく。ここでは高Ⅲになって3つの態度の関係が明確になる。すなわち保守的態度と大衆社会的態度とが近接し、革新的態度と対立的な関係を示す。態度の安定性には男女差があり、女子では保守的態度、革新的態度が早期からかなり高い安定性を示しているのに対し、男子では相対的に安定性は低い。

また、大衆社会的態度の弱いグループ（L群）でも大衆社会的傾向がしだいに強まっていく。態度間の関係は不安定であるが、高Ⅱ、高Ⅲでは保守的態度と大衆社会的態度の近接した関係が目立ってくる。女子については

保守的態度が中2以降で弱まっていることに特徴があるが、男子では高Ⅲでその傾向が伺われるにすぎない。

さらにそれぞれの態度ごとに結果を整理してみよう。保守的態度をみてみると、男子では全般に安定性が低く、しかも年次間の平均値とグループ間の差も不明確である。女子では特にM群とL群で安定性が高く、この2つのグループでは平均値が低下していく傾向がある。

革新的態度においては、女子のM群においてかなり高い一貫性がみられるほかはグループ間の差異は明確ではない。平均値の変動からみると、全般的には革新的態度の低下傾向が認められるわけであるが、特に男子L群の中1から中2以降への変化が明確であった。

大衆社会的態度は、全般的にみて安定性の高い態度であり、平均値の上昇がみられたが、この上昇は男女ともM群、L群において明確であり、男子のH群では逆に下降傾向が示された。

3. 6年間の態度構造の変動について

ここでは、因子分析によって見出された因子構造にもとづく項目グループ間の関係の変化を中心にみていく。

因子分析の結果などを参考にして、本研究では「大衆社会的態度項目群」、「保守的一革新的態度項目群」、「権威主義的一政治的無関心項目群」、「伝統的価値観項目群」の4つの項目グループを設定した。これらの項目群の内容を、われわれが当初設定した態度と関連づけてみると次のようになる。

保守的態度は、家柄、天皇などを重視した「保守的一革新的態度項目群」、上下関係や家族制度を尊重する「権威主義的一政治的無関心項目群」そして義理・人情を大切にしようとする「伝統的価値観項目群」にわかれる。

革新的態度は、自由や平等を尊重する民主主義的な考え方を基調としており、主に学校教育を通して伝達されるもので、ほとんどの項目が「保守的一革新的態度項目群」に含まれる。

大衆社会的態度は、他人への同調性を中心とした「大衆社会的態度項目群」と政治的無関心を中心とした「権威主義的一政治的無関心項目群」とにわかれている。

ここでは、上記の4つの項目群についての時点間相関あるいは学年別にみた項目群間の相関などを検討しながら、4つの項目群が相互にどのように関連しあっているか、また、学年の進行とともにどう変化していくかをみていく。

項目グループ相互の関連をみると、男女とも6年間を通じて仲間への同調傾向や感覚的な判断による行動様式（「大衆社会的態度項目群」）が、政治的無関心、上下関係や家族制度を重視する行動様式（「権威主義的一政治的

無関心項目群」と密接な関係にあることがわかる。これは、自分にかかわりのないことは深く考えないで日常生活を楽しもうという行動様式としてあらわれてくる。一方、同調的な行動様式は、家柄などを尊重する考え方を否定し自由や平等を尊重する民主的な生き方を肯定する考え方(「保守的一革新的態度項目群」とは別のものとして考えられる。これは、同調的な行動様式が仲間やマスコミによって助長される価値観であるのに対して、民主的な生き方を肯定する考え方が学校教育によって伝達されるものであること、大衆社会的態度項目群が感覚的判断に依拠する行動を多く含んでいるのに対し、保守的一革新的態度項目群は、むしろ観念的判断に依拠する行動を多く含んでいることによるものと思われる。

上述の3つの項目群が中学生・高校生の社会的態度の中核をなしていることは、本研究における因子分析などの結果から明らかである。また、これらの項目群がとくに女子において安定した傾向を示していることも示されている。

これに対して、義理や人情を大切に思い、親孝行などを重視するという考え方(「伝統的価値観項目群」)は、男女とも安定した傾向を示しているとはいえない。しかも、男子と女子とでは多少傾向が異なっている。男子では上記の3つの項目群との関連も明確ではなく、独立した項目群となっている。ここでは男子にとって、「世間をわたるには義理や人情が最も大切である」「目上の人にまつて敬語を使った方がよい」などということが、社会生活を送る上でのタテマエとして、他の項目とは別の次元で1つのまとまりをもっているのであろうか。

一方、女子の場合には、この伝統的価値観が、中学の時点では家柄などを尊重する保守的な価値観と関連がある。そして、この2つの価値観は、学校教育によって伝達される革新的な価値観とは対立するものとしてとらえられている。高校になると、この両者の関係が変化するわけではないが、伝統的価値観は、家柄などを重視する保守的な考え方との関連を弱め、むしろ、他人への同調性や感覚的な判断による行動様式と結びつくようになる。

4. 総括討論

われわれは昭和47年以来、中学生、高校生を中心として、社会的態度に関する調査的研究を重ねてきた(久世・速水、1974, 1975; 久世ほか、1977, 1978, 1979; 後藤ほか、1979)。それらの諸研究からわれわれは、どのような現代青年像を描き出すことができるであろうか。

彼らは全般に革新的態度が強いが、これは現実のたとえば日常生活での慣習に対する態度とはしばしば無関係である。彼らの社会的態度の基調となっているのは

大衆社会的態度である。特に同調的傾向は個々の青年の一貫した特徴を考える上で重要な鍵となる。大衆社会的態度のもうひとつの要素、社会事象への無関心傾向は、彼らにおいては他者との関係を表層的な水準にとどめようとする態度となって現われる。彼らはそこでいわば伝統的な対人関係のパターン、上下関係によりかかるとする。

社会的態度は彼らが所属する学校(ないしは大学)によっても、異なる特徴を示す。大衆社会的態度を構成する政治的無関心の要因は国公立4年制大学に在学する女子において低く、私立4年制大学に在学する女子においては高い。また保守的態度は国公立4年制大学の男女において低く、私立4年制大学の男女において高い。

青年期における社会的態度の形成に関わるものとしては、さまざまの要因を考えることができる。社会的態度は価値観と深い関わりを持っているが、この価値観は青年をとりまくあらゆる場面を通して伝達される。このうち主要なものとして家庭、学校、仲間集団、マス・コミュニケーションを挙げることができよう。これらを通して伝達される価値観は具体的な事象と直接関与するものから、高度に抽象化されたものに至る抽象度の異なるさまざまな形の情報として呈示される。個々の青年の立場からは、現実的・具体的な事象がどのような価値観に抽象化されていくか、さまざまの情報がどのように関係づけられ構造化されうるのかはしばしば不明確なものとしてしか把握できない。青年期の価値観・社会的態度の形成は、まさにこの多様な情報を統合し、深化させ、構造化していく過程であるともいえよう。中学から高校にかけて態度間の関係が明確になってくること、特に革新的態度と保守的態度の対極化が進むことは、このことを裏づけるものであろう。

青年がどのように価値観を受容し、統合していくかは、大衆社会的態度、わけても同調的傾向と深い関わりがある。

同調的傾向の強い青年は様々な場面で伝達される価値観を統合・整理できないままに受容していくと考えられる。大衆社会的態度の強いグループで態度の一貫性が低く、相互の関連も明確でないのはこのような事情によると考えてよいであろう。彼らに主要な影響力を持っているのは友人集団、家族、マス・コミュニケーションであろう。家族を通して伝達されるものは主として具体的な生活習慣のレベルでの伝統的価値観である。女子においては高校の時点で同調を中心とした大衆社会的態度因子と伝統的価値観因子とが関係を深めていくのはこのことと関わりがあるだろう。しかしながら我々が別に行なった面接調査の結果によれば、伝統的価値観から離脱して

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

いる別のグループの存在することが示唆された。これは特に同性の親との間の親子関係が関わっていると考えられる。このような家族関係と態度形成の問題についてはさらに検討を加える必要があるであろう。

一方、同調的傾向の低い青年の場合には態度形成のプロセスはより自立的な機序をもつと期待される。しかしながら、このグループに属する青年においても大衆社会的傾向は増大し、革新的傾向はむしろ減少する。また態度の構造化も目立って高くはない。ここでは項目別の反応傾向については触れなかったが、このグループでの大衆社会的傾向の増大は、政治状況への失望や将来の見通しの低下に特徴づけられているかもしれない。

われわれが実施した面接調査の結果によれば、このグループに属する青年は、直接的な対人関係に依拠せず、日常生活習慣から独立して判断をする傾向があった。伝統的な事物の受容も、日常の生活意識としての継承ではなく、テレビジョンや書物を通して行なわれていく点に特色があった。このことは、高校時点の大衆社会的態度因子と伝統的価値観因子とが相関を高めていく（特に女子において）という因子分析の結果とも一致する。このように大衆社会的傾向の低いグループにおいては他のグループとは異なる社会的態度変化の過程が現われる考え方されるが、この点についてはさらに検討を加える必要があるだろう。

革新的態度および保守的態度が現代の青年においてどのように形成されていくかは、それ自体、興味深い問題である。保守的および革新的態度は①家柄、天皇制の問題、自由・平等の問題など主として学校教育で扱われる価値観（第Ⅱ因子に相当する）、②上下関係や家族制度を重視し、対人関係を一定の形式にはめこもうとする態度（第Ⅲ因子の一部を形成する）、③情緒的な側面から義理・人情や慣習を重視しようとする態度（第Ⅳ因子に相当する）の3つの層を成している。

この3つの層の間の関連は学年によって変動するが、全体として男子では関連が低く、女子では高い。①は主として学校教育の場面で伝達の対象となり、③は主として家庭で、母親を媒介として伝達される。また②は主として性役割の分化を強調する社会生活の中で形成され、維持されていく。大衆社会的態度水準別の態度の時点間相関と態度間相関とを考慮すると、これらの関係は大衆社会的態度の低い女子において最も有機的に関連づかれ、一貫した傾向を維持していくと考えられる。

女子においては③の態度は母親との密接な関係を基礎としながら、具体的な習俗や慣習への姿勢として伝達されていく。こうした側面から女子に与えられる拘束はしばしば強い。従ってこれらを受容するか、そのような価

値観から離脱するかは、彼女らの態度構造全体と関わることになる。また彼女らの場合、学業の上の達成はしばしば伝統的な価値観や性役割観と対立する。学校を中心として伝達される革新的原理の受容は、おのずからこのような伝統的価値観の受容と拮抗していくことになる。

一方、この時期の男子においては③の伝統的価値観が伝達される機会は比較的小ない。これに対し彼らにおいては学業の上の達成は学校を中心として伝達される価値観の受容の契機となると同時に、伝統的な価値観や性役割観の受容とも共存する。このことが、男子における保守的一革新的態度の3つの層の相互の関連性の低さとなって表われるのであろう。

以上概観したように、青年の社会的態度形成は、単に外界から伝達される情報や価値観をそのまま継承・受容し、加算的に蓄積していくという形で進行していくわけではない。社会的な諸態度の間には有機的かつ論理的な関係が発生しうるが、その関係が個々の青年の中でどのように成立していくかは、個々の青年がいかなる状況に置かれ、態度の統合化への力がどのように働くかによっている。この過程には青年が具体的な事象のひとつひとつを抽象的な問題と結びつけ、また抽象的な原理をいかに具体化していくか、さらには抽象的原理相互の関係をいかに把握していくかという抽象的・論理的思考の働きが関与している。しかしながら、この抽象的・論理的思考力それ自体も、年齢によって他の事象から独立して形成されていくのではなく、日常生活での対人相互交渉のあり方や、たとえば、彼らの生活がどの程度計画的に、見通しを持って進めていくことができるかというような問題とも深いかかわりを持っているであろう。

5. 残された問題

われわれは縦断的資料の分析を通して青年期における社会的態度形成の過程を明らかにしようと試みてきた。社会的態度形成の過程には、全般的な社会的規定力と、それを具現化していく個々人の過程の二面を考えることができる。青年の社会的態度の全般的傾向を統計的に明示しようとする研究の方向は前者を、より臨床的な事例研究的な研究の方向は後者を明らかにすることをめざしているとみなすことができる。われわれがここで試みた縦断的資料の分析は、いわばこの2つの研究の方向の中間に位置づけることができよう。

社会的な諸々の影響力の統合と、具現化は、個々人の能動的な働きに依拠しており、それは個人に固有の過程を持つ。しかしながらこれらの過程は常に同時に社会的な諸力と、青年が発達していく上で問題とされるべき様々な要因の影響下にある。このような青年の社会的發

原

著

達の過程には、いくつかの“可能態”としての典型を考えることができるであろう。今回の報告で実施された分析は、このような青年期における社会的態度の発達についてのいくつかの具体像を描き出すことに寄与することができるであろう。

われわれは男女各々70名の中學・高校6年間にわたる社会的態度の縦断的資料および、高校Ⅱ年生の男女の面接資料を得ている。今回の分析で得られた知見をもとに、個人個人の社会的態度の変容についてより詳細な検討を加えていく予定である。

縦断的資料の分析については、われわれはこれまで様々な方法を試みてきた。第Ⅰ報で行なった変化のパターンによる個体のグループ化の試み、本稿で実施した大衆社会的態度水準によるグループ化の試み、因子分析による態度構造比較の試みは、縦断的資料に基づいて社会的態度の変化のパターンを求め、個人の社会的態度形成の過程の記述に近づこうとした試験的な試みであった。われわれは、どのような分析方法が最も適切であるのかをさらに探索し、縦断研究の方法的な検討も加えていきたいと考える。態度構造変化の記述に関する因子分析的方法の適用についてもさらに検討を加える必要があるであろう。

これらの分析とあわせ、ここでとらえられた現代青年像が社会的態度の発達に関する諸研究の中でどのような意義をもつものであるか、ここで実施された縦断研究の方法が青年期の社会的態度研究の展開にどのように関わりうるのかなどについても検討を加えることが必要となろう。

文 献

Bentler, P.M. 1973 Assessment of developmental factor change at the individual and group level. In J.R. Nesselroade & H.W. Reese (eds.), *Life-Span Developmental Psychology: Methodological issues*. New York: Academic Press.

後藤宗理・久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美 1979 大学生の社会的態度に関する研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 26, 37-53.

久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅰ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 21, 1-11.

久世敏雄・速水敏彦 1975 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅱ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 22, 13-24.

久世敏雄・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和・伊藤義美・石黒敬子 1977 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅲ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 24, 67-83.

久世敏雄・浅野敬子・伊藤義美・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美・池田博和 1978 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅳ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 119-129.

久世敏雄・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・池田博和・伊藤義美・浅野敬子 1979 中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(Ⅰ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 26, 17-35.

三宅一郎・中野嘉弘・水野欽司・山本嘉一郎 1977 S P S S統計パッケージ Ⅱ: 解析編 東洋経済新報社

(1980年7月31日 受稿)

中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（II）

付 表

この調査は社会や学校や家庭などに対するみなさんの考え方や態度について調べるもので、現代の中学生や高校生が一般的にどのような考え方をしているのかを見るのが目的ですから、思ったまま率直に答えて下さい。

名古屋大学教育学部教育原論研究室
発達心理学研究室

[中学・高校] [男・女] (あてはまる方を○で囲んで下さい)

____年____組____番

調 査 A

1 (やり方)

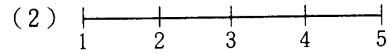
次の39のそれぞれの考え方や態度について、あなたが実際にどう考えているかを 1 非常に賛成 2 賛成 3 賛成とも反対ともいえない 4 反対 5 非常に反対 のうちから1つ選んで○印をつけて下さい。

非常	賛	な対	賛	反	非常
に賛成	成	ともいえ	成	対	に反対

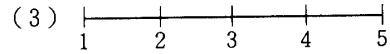
(1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい



(2) 個人の自由は尊重すべきである



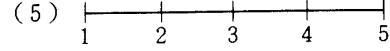
(3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい



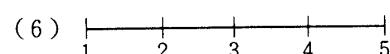
(4) 女が政治などに口だしすべきでない



(5) 正しいことであれば世間体など気にすべきでない



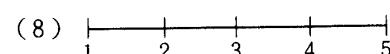
(6) 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない



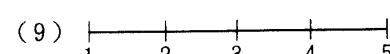
(7) 結婚は家柄を重んじなければならない



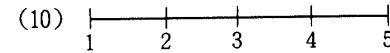
(8) いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい



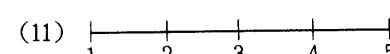
(9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする



(10) 伝統や習慣は尊重すべきである

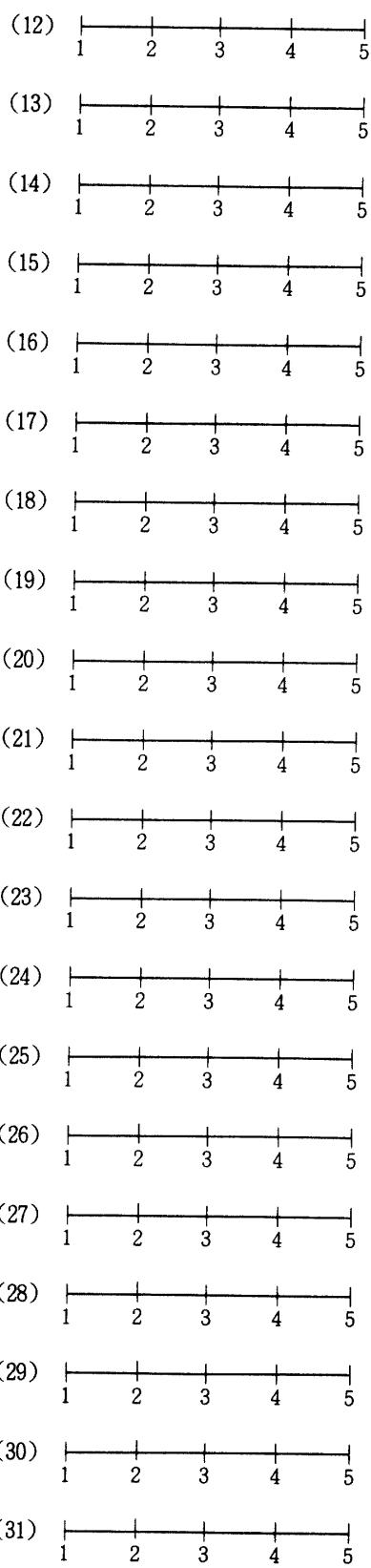


(11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである



非常に賛成	賛成	な対立	賛成もどき	反対	非常に反対
-------	----	-----	-------	----	-------

- (12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない
- (13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である
- (14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである
- (15) 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい
- (16) 長男が家をつぐのは当然だ
- (17) デモやストをするのは労働者の当然の権利である
- (18) 理論よりフィーリングやムードが大切である
- (19) 親孝行は子どもの義務である
- (20) 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する
- (21) 誰が衆議院の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う
- (22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい
- (23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない
- (24) 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい
- (25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである
- (26) 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである
- (27) 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする
- (28) 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない
- (29) 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである
- (30) ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ
- (31) 日本は天皇を中心にまとまるべきである



中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究（Ⅱ）

非常に賛成	賛成	な対立成もともいえ反	反対	非常に反対
-------	----	------------	----	-------

- (32) 「方角が悪い」などということはまったく信用しない (32) 1 2 3 4 5
- (33) いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない (33) 1 2 3 4 5
- (34) デモやストでさわぐのは民主国家の恥である (34) 1 2 3 4 5
- (35) 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい (35) 1 2 3 4 5
- (36) 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じる (36) 1 2 3 4 5
- (37) 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい (37) 1 2 3 4 5
- (38) 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである (38) 1 2 3 4 5
- (39) 公害問題は被害者と加害者だけの問題である (39) 1 2 3 4 5

A LONGITUDINAL STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF THE ADOLESCENTS (II)

Toshio KUZE, Motomichi GOTO, Keiko ASANO, Shuji MIYAZAWA, Katsumi NINOMIYA,
Hirokazu IKEDA, and Yoshimi ITO

The purpose of the present study is to examine, on the basis of the longitudinal data, how the social attitudes of students develop through the secondary and high school education. In order to explore this problem, three different designs of analysis are attempted; (a) to describe the changing processes of social attitudes during adolescence, i. e., from the first to the sixth grade years of education, (b) to compare the changing processes among subgroups divided on the developmental level of significant attitude, and (c) to examine the structural changes of social attitude on the basis of factor analysis.

The social attitudes for the present study consist of three scales: conservative, radical, and mass-social. The subjects are 70 boys and 70 girls in the attached schools of the Faculty of Education of Nagoya University. The longitudinal data are obtained over six years by monitoring once a year the same group of students, as they proceed from the first grade to the sixth grade in their secondary and high school education. They started the school in different years (in 1972, 1973 and 1974) and graduated 6 years later (in 1977, 1978 and 1979 respectively), but they are combined into a single group for the purpose of analysis.

The results of analysis are as follows.

A. Based on the descriptive analysis of the longitudinal data:

- 1) For girls, the mass-social attitude tends to be stronger with increasing age.
- 2) The intercorrelations of the mass-social scale measured over six monitoring years are significantly high for boys. For girls, the same intercorrelations for three scales, the conservative, the radical and the mass-social, are also significantly high over six years.
- 3) For all subjects, the correlations between conservative and radical scores are found significantly negative, and the correlations between conservative and mass-social scores are significantly positive over six years.

B. To compare the processes of change for the subsequent time periods, subjects were divided into three subgroups (High, Middle and Low) based on the developmental level of mass-social attitude score of the first grade.

- 1) The original differences among three groups established in the first grade on the level of mass-social attitude are maintained over six years of adolescence in the school.
- 2) For conservative attitude, no difference is found among these groups during the first grade, but girls' groups start to differentiate gradually from the third grade.

C. The results on factor analysis:

- 1) The factor analysis produced the following four dimensions. They are labeled as (I) mass-social conformity, (II) conservatism vs. democratic spirit, (III) authoritarianism and political indifferentism, (IV) traditional values.
- 2) The magnitude of factor loadings is found stable for all factors except the traditional values across the six time periods.
- 3) The intercorrelations within the scale measured over six time periods are found stable for all factors. In addition, the inter-factor correlation coefficients between factor (I) and (III) are high for each grade years.